止まない雨、病みゆく街

木臣又土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
止まない雨、病みゆく街

【Ｎコード】
Ｎ８６０４Ｚ

【作者名】
木臣又土

【あらすじ】
雨は、休みなく降り続いている。
涙を流すように、屍を洗い流すように。
人が、枯れていく。
あっさりと、無惨に朽ちていく。
終わりゆく街。
生き残っている人間は僅か。
そんな中で、少年は同じ天文部に属していた少女と小さな旅に出る。
かつて存在した四人の部員。

かつて存在した暖かい日々。
もう、空は鈍色に染まっていて、星を見ることは出来ないけど。
二人は水溜まりを力強く踏みしめて、進んでいく。
終末を迎えるその時まで。

プロローグ

雨が、止まない。
しとしとと、降りゆく雨は街を蝕んでいく。
アスファルトに当たるしずくは、小気味よい音を立てる。
地面に広がる水溜まりから、波紋が消えることは無い。
蔓延する湿気は、人々の心すら湿らせていく。
鉄で出来た建物は錆びて爛れていく。
臭気が鼻につく。
気分が、悪くなる。
「はぁ……」
とぼとぼと、亡霊のように歩くこの少年も、心が錆びれてしまったのかもしれない。
無気力に、怠惰に、覇気も無く生きる。
残り少ない生を、ただ息をするだけで過ごす。
それだけで良いだろうと少年は思った。
考えることすら億劫だった。
なのに、彼は今動いている。
同じ年齢の少女に手を引かれて。
「もっとしゃきしゃき歩きなさいよ。見てるこっちまで暗くなるじゃない」
薄暗い街には不釣合な金色の髪が光る。
外灯も壊れ、大概の店は閉店し、薄い霧が覆う道に、光を灯すように明るい少女。
「何処に行こうが誰もいないよ。なのに何処に行こうって言うんだ」
だが、手を引かれる少年はそれとは対照的だった。
言動に比例するような暗く、短い黒髪が特徴的だ。
いや、それしか特徴が無いとも言えた。

「まだ、誰かが生き残ってるかもしれないでしょ。諦めるのはまだ早いわよ」
「生き残ってたとしても何も出来ないし変わらないだろ」
「本当に星太は卑屈よね、名前に謝らないといけないんじゃないの？」
「うるさいな、僕だって好きでこんな名前になったんじゃないよ」
星太と呼ばれた少年は、道の端にある溝を見て溜息を吐く。
そこには人が横たわっていた。
恐らく死んでいるだろう。
けれど、今更驚きはしない。
死体など、もう見慣れたからだ。
突如蔓延した奇病によって、街の殆どの人間は死んだ。
そのせいで死人の供養すらろくにできない。
屍がそこいらに転がっている場所もある。
火葬場など機能してはいなかった。
いや、街だけでは無く、国もだ。
日本という国は、既に崩壊しているに等しい。
御陰で外部との連絡すら取れない。
もしかすると、ここは隔離されているのかもしれないし、閉鎖されているのかもしれない。
けれど、それを確かめる術は無い。
暫く歩くと、少女の家の前に着く。
表札には「水瀬」と書かれていた。
「なぁ、一回休憩していこうぜお前んちでさ」
「そうね、一度入りましょうか」
引き戸を引いて家に入る。
現代には割と珍しく、木造の家だ。
廊下を歩き、居間にある冷蔵庫を開ける。
何処で汲んだのかも分からない水が入っていた。
星太は断りを入れてからその水を飲む。

「……不味いな」
濁ったような、腐ったような味。
けれど、文句は言えない。
飲めるだけでも感謝すべきなのだろう。
「そういえばさ、お前の家に赤ちゃんいたじゃん。えーっと……青ちゃんだっけ」
「ああ、いたわよ」
「今は、どうしてんの？」
「……いるわよ」
そう言って少女は部屋を変える。
星太は黙って付いていく。
その間に会話は無かった。
障子を開けると、小さな部屋の真ん中に何かいた。
雨音が外から薄く聞こえる。
星太はそれに近づき、拾い上げる。
「青……ちゃん」
手に抱えられたしわくちゃなもの。
それは来年、三歳になる幼児だった。
老衰で死んだかのようにしわくちゃで、枯れているようだった。
――この国に蔓延している奇病。
発症すると、急激に老化が始まる病。
その早さ、一秒で一歳。
恐らく、この幼児は発症してから一分半程で死に至ったのだろう。
早すぎる死。
けれど、星太は悲しいとは思わなかった。
これが普通なのだ。
皆、同じように死んだ。
そして、恐らく自分たちもいつか死ぬのだろう。
そう考えると、何も感情が湧いてこない。
――あぁ、一足早く逝きやがったな。

それぐらいしか思わない。
多分、思考が麻痺してしまったのだろうと思った。
毎日毎日、同じような死体を見てきたから、見慣れたのだろう。
この家には、もうこの少女しかいない。
水瀬の性を持つのはこの少女、水瀬衣織だけだ。
それもいつか枯れるのだろう。
「ねぇ星太、あんたの家は……」
「死んだよ、あっさり逝った」
兄も両親も、皆等しく干からびて死んだ。
秒針が時を刻む毎に顔を歪め、命乞いをしながら枯れていった。
あっさりと、無惨に生を終えた。
その時も星太はただ呆然と見ていた。
余りにも現実離れした光景だった。
血が出るわけでもなく、痛みを感じるわけでも無い。
一分足らずで訪れる死。
余韻に浸る暇すら無かった。
「天文部の皆はどうなのかな」
ふと、衣織は呟いた。
街がこんなになる前、星太たちは部活動に属していた。
部員四人のこじんまりとした部。
それが、星太の居場所だった。
今となっては、とても懐かしい。
「さぁ……生きてるのかな」
今となっては分からない。
けれど、星太は皆に会いたいと思った。
「見に行ってみようか」
手にもった幼児の屍を丁寧に供養してから、言った。
「うん、そうね……行きましょう」
衣織は頷く。
衣織の家を出て、空を見上げる。

依然、雨は上がらない。
鉛色の雲が、空を覆っていた。
青だけが広がる空を最後に見たのは、いつだっただろうか。
星太はそんなことを思った。
「これじゃ、天体観測も出来やしないな」
星など見えない空を見る。
そもそも、明日の生死すら見ることが出来ない。
「そうね、これじゃ星……見えないわね」
残念そうに言ってから、二人は歩き出す。
かつての輝かしい日々の残骸を見るために。

一章

「あたしさ、水希の家知らないんだけど」
水溜まりを踏み、飛沫を飛ばしながら衣織は言った。
「は？　僕も知らないぞ」
「何で四人しかいない部員の住んでる家も知らないのよ……」
「いや、部活で一緒にいるだけで事足りたからな」
衣織は軽く溜息をつく。
坂道を登る足取りが、止まる。
呆れたような表情で、上から衣織は星太を見た。
「あんたってさ、そういう目で誰かを見たこととか無いの？」
「そういう目、とは？」
星太には衣織の言っている意味が良く理解できない。
「天文部ってあんた以外全員女の子だったじゃない」
「え、衣織は女だったのか」
次の瞬間、紺色のジャージに包まれた衣織の蹴りが星太の脛に直撃する。
「痛ってーな！　冗談だよ、冗談！」
「笑えない冗談は止めてよね。思わず蹴りそうになっちゃったじゃないの」
「お前、本当にそう思ってんなら病院行った方が良いぞ。夢遊病の恐れがある」
「冗談よ、冗談」
「全く、笑えない冗談は止めろよな……」
星太は視線を外す。
道の両側に付いている溝からは、水が溢れ出している。
溢れ出た水は、死人の体液と混じって腐ったようだ。
異様な臭気が立ち込めている。
それが輪を掛けて星太の気分を悪くする。

「見たことねぇよ、そんな風になんてさ」
「へぇ、そうなの」
「ああ、変に誰かに関わっちゃったら部の空気が悪くなるかもしれないだろ？」
「意外に色々考えてたのね、あんたも」
「悪かったな、考えてて」
天文部は、星太以外の部員は全員女性だ。
衣織、水希、葉子。
それに星太を含めて、晴れて部員が全て揃う。
「葉子の家は知ってるのか？」
その問いに衣織は頷く。
どうやらそれは把握しているらしい。
「なら、そっちから回ろう」
「そうね」
星太の視界の上がちかちかと光る。
壊れかけた外灯が最後の力を振り絞るように点滅していた。
住宅街に入ると、臭気が増した。
「うっ……こりゃ酷いな」
家を五軒跨ぐ間に、二人の亡骸を確認した。
一人は干からびて、皺くちゃになっている。
もう一人は眉間に刃物で刺されたような後があった。
これは病では無いなと星太は思った。
残り少ない死期を前にして、錯乱した誰かに殺されたのだろう。
無数に、とは言えないが、割と有りうる話だ。
警察など、この街では機能しちゃいない。
奇病が蔓延し始めた頃は酷かった。
所々の店が荒らされ、蹂躙しつくされた。
死を前にした人々の狂気は恐ろしい。
それを嫌という程、星太は目にしてきた。
親友の翔太も、そんな連中に殺された一人だ。

死んだ翔太の顔は、生前の端正な顔立ちが嘘のように、顔面が正確に判別できないほど歪んでいた。
死の街、というのがこの場所には相応しいのかもしれない。
何もかもが狂っている。
「僕も、狂ってるんだろう」
そう呟いた声は雨音にかき消された。
こんな死を待つだけの街で、思い出を掘り返す為だけに生死も分からない者を探す。
なんて馬鹿げた話なんだろう。
けれど、それに付き合う衣織も大概狂っている。
「相変わらず大きいわね、葉子の家は」
葉子の家の前に着く。
高級住宅街に鎮座しているだけあって、家はそこいらの家よりも一回り大きい。
庭があって、高級そうな外車が止まっている、が外車は所々にへこみが見られた。
多分、誰かが鈍器で打撃を加えたのだろうなと星太は思った。
これでは、家主の命が無事かも怪しい。
インターホンを鳴らして間も無く、高く透き通るような声が聞こえた。
紛れも無く岩峰葉子の声だった。
「葉子！　あたしよあたし」
「誰……ですか？」
「あたしだって、あたし！」
「おい、名乗れよ。おれおれ詐欺みたいじゃないか」
「あ、そうね、衣織よ」
インターホンごしに、息を飲む音が聞こえた。
「衣織……ちゃん！？」
「星太もいるわよ」
葉子は驚いているようだった。

無理もない。
かつての仲間がまだ生存している上に、訪問しにきたのだから。
「どうぞ、遠慮しないでください」
玄関に通される。
純金の招き猫が出迎えてくれた。
ブランド物の靴が綺麗に揃えられている。
だが、どれだけ金があって裕福でも、命は買えない。
「……おぉ」
星太は思わず感嘆の声を漏らす。
久しぶりに見る葉子は、やっぱり綺麗だった。
温和で、何事にも動じずにいられる芯の通った女性。
編まれた髪が、横髪として垂れている。
それでも尚、余りある艶やかな玄のような黒髪は、後頭部付近にまで伸びている。
一目見た印象は、清楚で謙虚。
けれど、胸に秘められた二つの果実だけは、隠せないほどの存在感を誇示していた。
「近所の人も、皆亡くなってしまって、とても不安だったんですけど……お二人が来てくれて良かったです」
「そうか……やっぱりこの辺りもほぼ全滅だったんだな」
「……ということは星太さんの周りも？」
黙って星太は頷く。
場には重い空気が流れた。
均衡を破ったのは衣織だった。
「ま、まぁあたしたちはまだ生きてるんだしさ、悲観しなくても良いと思うけど
」
「うふふ……衣織ちゃんは相変わらずですね」
嬉しそうに笑う葉子。
昔の日々を思い出しているのかもしれない。

星太も、少し懐かしい気持ちに包まれた。
「葉子の家族は……どうなんだ」
思わず聞いていた。
無礼だと、無神経だとは分かっていた。
けれど、麻痺している星太には流れ出る言葉を止めることが出来なかった。
こほんと小さく咳をしてから、葉子は言った。
「私は、両親は駄目だったんですけど、まだ弟が生きていてくれるからそんなに悲観してはいないですよ」
「そうなのか、ならまだ良い方だ」
既に身内が数人死んでいても、誰か一人でも肉親がいるのなら御の字だろう。
「お姉ちゃん！　この人たち、誰？」
広々とした、品のある廊下を駆けてくる少年。
小学生ぐらいだろうか、無垢な瞳が印象的だ。
「この人たちはね、ほら、天文部の……。前に言わなかったかしら」
「ああ！」
少年は納得したようだ。
「あねがおせわになっております」
ぺこりと頭を下げる少年。
中々どうして礼儀正しい。
「流石、坊っちゃんよね」
感心したように衣織は言う。
「お前より礼儀良いよな」
平手打ちが星太の頬を襲った。
頬が赤く腫れる。
「弟の優です」
温和な表情を浮かべて、葉子は弟を紹介する。
「可愛らしい子だな」

優はとてとてと葉子の元へと走りより、抱きついた。
それを優しく抱きしめる葉子。
「はい、私の心の支えなんです」
星太は腰を低くして、優に話しかける。
「お父さんとお母さんがいなくて、寂しくないのか？」
「うん、最初は凄く悲しかったけど、僕にはお姉ちゃんがいるから」
「そうか、強いな」
優の頭を撫でる。
弟がいたらこんな感じなのかと星太は思った。
「そういえばさ、葉子。水希の家の場所、分かる？」
「水希さんですか？　分かります……けど、多分お家にはいらっしゃらないと思いますよ」
「どういうことだ？」
星太は問う。
頭を過ぎる、様々な可能性。
そのどれもが、外れていることを願う。
「何だか、今でも学校の屋上にいるそうなんです。そのせいで余り家に帰らないとか聞きました……」
星太は思わず苦笑する。
それに呼応するように衣織も溜息をついた。
「相変わらずだな」
「そうね」
そこまで言って、二人は腰を上げる。
「ちょっと見に行ってくる」
「屋上にですか？」
星太は頷く。
依然、雨音が外から聞こえてくる。
「私は、優に何かあるといけませんので……」
「うん、弟さんの側にいてあげて」

衣織は無邪気に笑う。
二人は大丈夫だろうと思った。
互いが支えになっているのなら、何とかやっていけるだろう。
「じゃ、行くな」
玄関を開けて、外に出る。
向かうのは学校の屋上だ。
そこは、天文部の活動拠点。
懐かしさが、込み上げてくる。
星太は一歩踏み出して、衣織を見た。
「熱心に活動している部長を、冷かしに行くか」
薄く、衣織は笑みを浮かべた。
「そうね、行きましょうか」

二章

罅が校舎の壁を這っている。
所々がくすんでいて、お世辞にも綺麗とはいえない築五十数年の校舎。
鈍色の雲が晴れたとしても、決して汚さは変わらないだろう。
ここが、星太たちの学び舎だ。
「懐かしいな」
しみじみと感慨に浸る星太。
「いや、あたしたちはまだ生徒だからね」
とは言っても、この騒ぎの中では二度と通うことにはならないだろう。
三学年、三百数名の生徒の内、大半の生徒はもう、校舎を見ることすら叶わない。
校門を潜ってすぐにグラウンドが広がっている。
放課後には運動部が猛々しく走り回っていたものだ。
しかし、今のグラウンドは雨によってぐちゃぐちゃになっていた。
ゼリー状になった泥が、進行を阻む。
踏み入れた足を呑み込む。
「もう、二度とグラウンドは使えないだろうな」
「いや、あんた文化部だから使わないでしょ」
「体育では使うかもしれないだろ」
「いつも保健室でさぼってたじゃん」
「そうでした」
校舎に入ると、靴箱が出迎える。
放置されたままの上靴が並んでいた。
もう二度と、履かれることはないだろう。
湿気ていて、埃臭い。
「えーっと、屋上はどこから出るんだっけ」

「確か、本館からだったような気がするわ」
星太の通っている高校は、三つの館から成っている。
北館と南館、それに屋上に出れる本館。
本館の二階に上がった時、衣織は足を止める。
「ねぇ、ちょっと寄っていかない？」
衣織が指さしたのは教室。
かつて、星太と衣織が属していたクラスだ。
水希と葉子も、クラスメートだった。
「そうだな、寄ってくか」
立て付けの怪しい扉を開ける。
少し力強く押せば、倒れてしまいそうだ。
教室に入ってすぐ、星太の顔が歪む。
「はは……酷ぇな」
乾いた笑いを浮かべる星太。
机が等間隔に並べられ、綺麗な黒板があったはずの教室の姿は、無い。
机も、椅子も地震に襲われたかのように散乱し、黒板には穴が空いている。
窪みの形跡からして、椅子か何かで殴打されたのだろう。
木の部分が剥き出しになっていた。
罅が這っている壁に飛び散るのは血。
乾いて色褪せてはいたが、確かに血痕だった。
「ねぇ、星太、あれ……」
教室の端に、ぽつんと横たわる何か。
近づいて見てみると、それは死体だった。
奇病に侵されている上に、顔が殴打されていて誰だか判別することも出来ない。
生徒なのか、教師なのか、はたまたそれ以外の誰かなのか、窺い知ることは出来ない。
「何処だよここ……」

思わずそう漏らしてしまう程、二人の中にある教室の記憶とは結びつかない。
まるで別世界に足を踏み入れたようだ。
ここは、かつての賑わっていた教室では無い。
うるさいほどの笑い声も、チャイムの音も、聞こえない。
今はただ、雨音が虚しく響くだけだ。
「このままさ……あたしたちがここに来なかったら、この人、誰にも見つけてもらえなかったのよね」
不意に、衣織がそう呟いた。
その横顔には、哀愁が含まれているように見えた。
「あたしたちもさ、死んじゃったらさ……誰からも忘れられて、誰にも見つけられずに死んじゃうのかしら」
唐突に、衣織は言った。
いつもの明るい彼女では無いように見えた。
いつか来る死に、怯えているのだろうか。
「怖いのか……？」
「当たり前でしょ。自分が生きた証が、何もかも無くなるんだから」
なら、と言って星太は黒板にチョークを走らせる。
小気味いい音を立てて、文字が描かれていく。
『天文部：水瀬衣織』
決して綺麗とは言えない字で、続けて書く。
『天文部：影山星太』
書き終えて、手を払う。
チョークの白い粉が宙に舞う。
「こうすれば、名前だけは残せるだろ。ほら、生きた証だよ。まぁ、気休めなんだけどさ」
衣織は黒板の字を見て、笑う。
「下手な字ね」
「悪かったな」

衣織は教室を一足先に出る。
踵を返し、星太を見て言った。
「でも、汚くは無いわ」
「そうかい」
チョークを床に投げ捨てる。
白の破片が、飛び散った。
星太も追って教室を出る。
黒板には、二人の名前が大きく刻まれていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8604z/

止まない雨、病みゆく街

2011年12月29日00時55分発行